中等美術教育におけるコラージュの活用

藤井　里奈[*1]・平田　季雄[*2]・上原　一明

Utilization of a collage in secondary education

FUJII Rina[*1], HIRATA Sueo[*2], UEHARA Kazuaki
（Received December 21, 2017）

キーワード：中等教育、美術、コラージュ、アッサンブラージュ

はじめに

スマートフォンやタブレット端末など、近年新たに生活の場や学校教育に普及し、多様な機能を備えたバーチャルで便利なソフトで溢れている。確かに最新の機材によるより効率的な生活や学習方法は、こらからの新しい時代の生活スタイルや、教育方法の手助けにはなるであろうが、それに伴う欠落が生じることは否めない。またこれらの傾向により、バーチャルな画面の中でしか世界を認識できなくなるかもしれない児童・生徒にとって、実体という存在価値を尊重することの意味を理解できなくなる危険性もなくはない。従来の学習方法と未来型の学習方法の折衷、すなわち時代に合うバランスの取れた学習方法が望まれる。コラージュという手法は、既に100年前に開始されたものであるが、従来の学習方法と未来型の学習方法の折衷という観点からみると、両方の要素を併せ持つものと考えられる。

本論は、コラージュの手法を用いた中学校美術の授業の実践を元にその教育的効果を検証することにより、美術科教育としてのコラージュの可能性を検証する。

１．中学校美術におけるコラージュ授業の実践（藤井）

１－１　コラージュを授業に取り入れる理由と目的

コラージュは教科書や資料集にも掲載されているモダンテクニックのひとつである。他のモダンテクニック（デカルコマニー・マーブリング・ドリッピング・フロッタージュ）などに比べて生徒作品に自然と使われていたり、一度はしたことがあったりと、子どもたちにとっても馴染みがあり、受けいれやすい技法であると言える。

またコラージュの特徴として描いたり作ったりする技術を要せず、気軽に取り組むことができる。描写力や手先の器用さに自信のない子どもでも、楽しく取り組むことができ、コラージュに使う材料を探す中、画面の上で構成物を動かしながら様々な構想を考える中で、子どもの豊かな想像力、発想力、表現力を育むことができると考える。

１－２　授業内容と生徒の反応

授業は山口市立湯田中学校の１年生（３クラス）で実施した。

まず作品Ａ「ピカソ/ギター」（資料１）をスライドと手元のワークシートの資料を使い見せる。子どもから気づいたこと、見えるもの、印象を発表してもらう。「何か紙が貼ってある」「新聞のように見える」などの意見が出た後「この作品は誰の作品だと思う？有名な人だよ。」と聞くと子どもから「ピカソ」と答えがでてきた。ワークシート（資料１）の空欄に作品名「ギター」、作者名「ピカソ」、制昨年「1913年」を記入させる。子どもが記入したことを確認し作品で使われている紙や布などを貼る手法を「コラージュ」

＊１　山口大学教育学部大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修　＊２　山口市立湯田中学校

と言い、今日のテーマでもあることを伝える。
　次にコラージュの語句説明を、空欄を埋めながら行う。生徒が空欄を埋めたことを確認し、スライドでコラージュ作品をいくつか見せていく。コラージュは私たち鑑賞者から見るとなんの脈絡もなくただ適当に貼ってあるように見えたり、現実ではありえない組み合わせになっていること、隠れたメッセージ性があることなど、コラージュの特徴やおもしろさが伝わるよう説明する。
　いくつかコラージュ作品を見せ、コラージュがどんなものか説明をした後、今日のめあて「写真をもとにコラージュ作品を作ろう」を提示し、今日の活動を授業者の作った参考作品を例に説明をする。

授業者の呼びかけ：
　〇持ってきた材料や後ろの机に置いてある材料を使ってコラージュ作品を作ってみよう。
　〇作品はできるだけ多く作れると◎（一人２作品の制作は頑張ろう！）
　〇作品ができたら必ず裏にクラスと名前を書いてください。
　〇作品がある程度できたら、出来た作品の中からコレだ！と思うお気に入りを選んで
　　ワークシートの四角の中に作品を貼り、タイトルと作品についてのコメントを書いてください。

　説明が終わった後、時間の確認をして活動に入る。活動が終わったらワークシートの感想の記入と振り返りシートの記入をさせる。

１－３　子どもの感想から

・時間がかかった。特に考えるぶぶんが。
・初めどんな材料を使おうか悩んでいたけど、１回貼ってみると楽しくなって、悩まずにでき楽しかった。
・やっていくうちに最初はまったく思いつかなかったけどだんだん思いついてきてたのしかった。
・最初はなにをどうやればいいか分からなかったけれどなんとなくはっていくうちに作品になっていったのでおもしろかったです。
・コラージュはとても簡単でとても楽しかったです。またやってみたいと思いました。
・コラージュ体験を今日始めて行いました。考えるのがとても楽しく、とっても面白かったです。またコラージュ体験を生かして作ってみたいと思いました。
・切ってはるのが意外と頭を使った。
・いろいろな発想ができたのでたのしく勉強もできた。
・自由に切ってはってできたのでたのしかったです。
・いろいろなつけたしができたので、とてもたのしかったです。
・最初は難しくてあまり進まなかったが、やっていくうちになれてきて、最後はとても楽しんで作業をすることができたと思う。
・切るのが思ったより難しかった。
・今日の授業はものを切ってはるという楽しさを知った。
・今日はじめてコラージュというものをやりました。これは置く配置を考えないと難しいなと思いました。
・発想はたくさん思い浮かんだが完成させるまでがすごく難しかったです。特定した文字や絵を見つけるまでも難しかったです。
・ゴミがたくさんでていた。

　授業の感想から多くの生徒がコラージュの授業を「楽しい」と感じたことが分かる。また、今回の授業の感想に「難しかった」と記入している生徒が何人かいた。難しいと感じた生徒のうち何が難しかったのかその考えられる要因について分類を行った。

①材料選び・探し
・初めどんな材料を使おうか悩んでいたけど、１回貼ってみると楽しくなって、悩まずにでき楽しかった。
・発想はたくさん思い浮かんだが完成させるまでがすごく難しかったです。特定した文字や絵を見つけるまでも難しかったです。

②発想
・時間がかかった。特に考えるぶぶんが。
③構成
・今日ははじめてコラージュというものをやりました。これはおく配置をしっかり考えないと難しいなと思いました。
④技術
・切るのが思ったより難しかった

以下、４つの分類について想定していた事と想定外の事、感想で浮き彫りにされた生徒の目線からみた授業内容の問題点などを記述する。

①について
授業前に参考作品を提示し材料を各自持ってくるように呼び掛けたが持ってきていない生徒も多く、授業者の準備した旅行雑誌や展覧会のフライヤーなどの材料を使用して制作された作品が目立った。また各自が持ってきた資料として多かったものは折り紙、雑誌の切り抜き、スーパーなどのチラシ、インターネットから得た印刷物などであった。持ってくる材料の個数を指定する、授業者の準備する材料を増やすなどの改善をする必要があると感じた。
①から③について
制作の手がかりとなるような作品例を見せる、悩んでいる生徒に対してアイデアの提案やアドバイスを行う、また十分な時間を設けることなどが必要だと感じた。
④について
今回制作時間を考慮し作品の台紙となる写真はA6サイズ程の大きさにした。画面が小さいことで貼る材料の大きさや細かさから、切ることに難しさを感じたのだと思われる。切る際の雑さは作品の完成度を下げてしまったり、子どもの制作意欲を削ぐ原因になるため台紙を大きくすること、焦らず作業できる時間を与えてあげることなどに配慮するべきだと考えた。
②と④について
②④などの難しさを感じている子どもには「切る」のではなく「破る」作業をアドバイスしたが、オートマティスム的な作品に対する理解が少なくそのようなものを「作品」と認識している子どもが少なかった。そのような作品を授業者が求める場合しっかりとコラージュのパターンとして作品例などと共に説明できればオートマティスム的な作品も増えたのかもしれない。

１－４　コラージュを扱った授業の利点と問題点

作品を返却した時、生徒は自分の作品や友達の作品を見て「なんだこれ」「意味が分からない」「これ何」「おもしろい」と自然と話しをしていた。全体的に時間が短くなってしまったが、しっかりと構想、制作、鑑賞ができる時間を設けることが必要だと感じた。短い時間でも鑑賞の時間を設け、作品を通したコミュニケーションの場を授業内でつくることができていればよかった。

今回のコラージュを使った授業を通して、生徒が「楽しい」「おもしろい」と感じていることは授業の中で強く感じた。しかしまだ、ただ切り貼りによって構成を楽しむだけでは中学校の美術で扱うには、「制作」より「遊び」に近く、何等かの工夫が必要であると感じた。楽しく、簡単にできる制作なので授業の導入、年度初めに行うオリエンテーションなどに活用することで美術に対する苦手意識の解消が期待できるのではないかと考えた。

また感想の中でコラージュ制作の際出たゴミについて触れている生徒がいた。もともとコラージュやアッサンブラージュなどは紙切れや廃棄物などを利用する廃物美術（ジャンクアート）に起源する一面もあり、ゴミと思っていたものが再構成することで新しい美しさが見いだせるおもしろさも併せて伝えるとよかったと感じた。

２．授業への取り組みを振り返って（平田）

今まで、コラージュを制作の一つの技法として取り上げたことはあったが、制作の中心にしたことはなかったため、「コラージュを使って制作をしてみたい」という話に、最初は少し驚いた。また、同時に今までコラージュという技法についてあまり深く考え・研究していないため、どんな構想・展開がなされるのか興味もわいた。

すでに決めた年間の予定もあり、今回は、１年生で印刷物の「形」や「色」を組み合わせて「切る」「貼る」という基本練習をしたに過ぎないが、わずか１時間の授業の中で生徒が楽しそうに取り組む姿に、コラージュという技法の次のような可能性を感じた。

（１）様々な制作を進める際には、これまでも可能な限り制作に必要な技能習得のための練習時間を取り、満足のいく表現につがるようにしてきた。コラージュの「切る」「貼る」という遊び感覚にも似た単純作業は、事前に多くの練習時間を取らなくても失敗を恐れずに楽しくできる技能といえる。
（２）もともとコラージュを含めた技法練習に取り組む生徒の関心は高く、楽しそうに活動する。中でもコラージュは、他の技法と違って偶然性に大きく左右されにくく、目の前に既にあるイメージを利用することから、つくり手の意図が反映されやすく満足度も高くなる。
（３）素材となり得るものは、印刷物に限らず多岐にわたる。テーマに合わせて素材を自分で創る・選ぶ楽しさも生まれる。

今回実施した授業には、次の改善点をあげる。

（１）事前に多くの印刷物を準備し、生徒ができるだけコラージュの練習に取り組みやすい環境を整えていたため、授業はスムーズに進んだ。コラージュへの初めての取り組みとしては、これでよいのかもしれないが、作業内容としてはそこまでの抵抗感もないため、具体的なイメージをもっともてるように、事前にテーマを示し素材集めることから取り組ませる。
（２）差し込みのような授業形態であるために難しい面もあるが、コラージュで授業を展開する全体計画を最初に示す。制作を通して生徒にどんな力をつけたいのかをはっきりさせると、テーマの与え方や制作する作品の内容がもっと見えてくる。
（３）どんな活動でも振り返る場面を設定することで、次の展開への意欲や新たな発想や工夫につながる。授業の反省を全体で伝えたり、一人ひとりのワークシートに簡単にコメントを書いたりするなどして、生徒が自分の活動について振り返ることができる場面を設定する。

３．コラージュの美術史的定義と学校教育における美術教育的利点

「コラージュ」（Collage（フランス語））とは、20世紀初頭ブラックによる「パピエ・コレ」（Papier collé（フランス語）＝貼り付けられた紙）という、作品ベースとなる平面支持体に異なる平面要素を貼り付けて完成された手法から始まる。更にピカソによる異素材の貼り付けによる画面構成の絵画作品として展開し、マックス・エルンストによりひとつの絵画手法として確立された経緯がある。以後、様々な作家により絵画作品やデザイン、ポスターとしても活用されている。近年では、パソコンによる切り貼りされたデジタル写真などを画像処理し、構成したものもコラージュ作品として取り扱われている。更にまた1950年代より、コラージュの立体版ともいえる「アッサンブラージュ」（Assemblage（フランス語）＝寄せ集め、組み合わせること）という、平面表現から立体表現へと発展した手法へと進化していく。両者に共通することは、マルセル・デュシャンの「レディメイド」による、既製品を用いた作品創作の新たな意味の構築を原点とし、多種多様な素材を取り入れた作品構成といえる。コラージュやアッサンブラージュ制作においては、アカデミックなデッサン力や顔料の色彩調合力などの技術的な能力を必要とはせず、既にあるものを如何に組み合わせるかという感性や色彩構成力、または立体構成力が問われる。

中等教育における美術教育の問題点のひとつとして指摘されることに、描く行為や彩色する行為、更に工作・造形する行為に対する不特定多数の生徒達の苦手意識や完成作品に対する不達成感ということがある。

画力や色彩感覚は、ある程度の描画訓練や各生徒の美術に対する好奇心に伴う創作向上心があれば、自身のイメージ通りに描けたり、作品制作による達成感を得ることができる。しかし中等教育において全ての生徒をここまでの域に引き上げる必要があるとはいえない。情操教育としての役割を担う表現教育のひとつとしての美術教育的観点からいえば、決して画力を重視するべきでなく、むしろ生徒個々人の個性的感性の多様性を重視し、尊重することにウエイトを置くことが重要であるといえる。このような意味合いを考慮すると、「コラージュ」や「アッサンブラージュ」という表現方法は、特別に鍛え上げられたデッサン力や色彩調合力を必要とせずとも、生徒の画面構成センスを以て作品制作を可能とすることができるという利点がある。

おわりに

コラージュという手法を授業の中にとりいれた一例として、本授業は生徒にどのような学習効果があったのか、という結果論においては、1時間だけの授業であったため、十分な結論はだせない。しかし、生徒は短時間の間にたくさんある写真や文字を直感的に選び、自身の関心や興味のあるモチーフを楽しく自由に構成していた。コラージュには画力は必要なく、多様な情報の選別と画面構成力で一定の完成度にもっていける利点がある。しかも制作に時間がかからないという点も、生徒の集中力が維持できる範囲内にあるということでも有効といえる。ただし、著作権や肖像権の問題を考慮することや、作品内容について倫理的な問題が生じていないかを注意する必要がある。

今回はコラージュという手法で授業を行ったが、次回はアッサンブラージュという手法に発展させるという方向性も考えられる。アッサンブラージュとはコラージュの立体版であり、廃棄されて不用品など様々なものを利用することで、平面的なコラージュでは表現できない立体的構成を楽しみ学べることが期待される。

なお本論文は、第一章を藤井が、第二章を平田が、その他を上原が執筆し全体を総括した。

謝辞

本論文は、山口大学大学院教育学研究科の教職実践特別演習において、藤井の配属校である湯田中学校の指導教諭・平田季雄先生のご理解とご協力の元、本授業が実現できました。あらためて感謝の意を表します。

参考文献

海野弘　『二十世紀の美術 1900-2010』2012年　新曜社

参考資料

資料１　http://artprogramkt.blog91.fc2.com/blog-entry-107.html

資料１

ART　　1年（　）組（　）番 名前（　　）

1．コラージュ作品を見てみよう

○作品を見て受けた印象や気づきを考えよう

作品名　（　　）

作者名　（　　）

制作年　（　　）年

【コラージュ】（　　）語で（　　）

ピカソやブラックによって始められた技法で新聞紙、雑誌、布などを貼り付けることで特殊な効果を出す技法。